

滅諦の大乗アビダルマ的分析

吉 元 信 行

1. はじめに

滅諦は仏教における究極的覚証の境地たる涅槃の同義語であり、そのため、四諦の一にも数えられ、仏教では最も重要な概念であるとされる。それだけにこの概念は、原始仏教以来、仏教諸学派において多様に把握され、而も、各学派間においても種々の論議を呼んで来たところである。

殊に、アビダルマの時代に、説一切有部では、滅諦・涅槃は、あくまでも無為法であって、択滅と名付けられ、その体は実有であるとされた。これに対して、譬喩者たちは、それは集・煩惱・諸苦の永滅に名付けたもので、別に自体あるものではなく、仮有であると考え、両者の間に種々論争のあったことはあまりにも有名である。これらの論争を踏まえ、瑜伽唯識学派では、譬喩者の考えに近い方法論を取りつつ、滅諦・涅槃を更に多様な面から捉え、そこに彼分涅槃の如き仮なるものと、永遠なる真如の相としての実体的なものとの両面のあることを主張した。

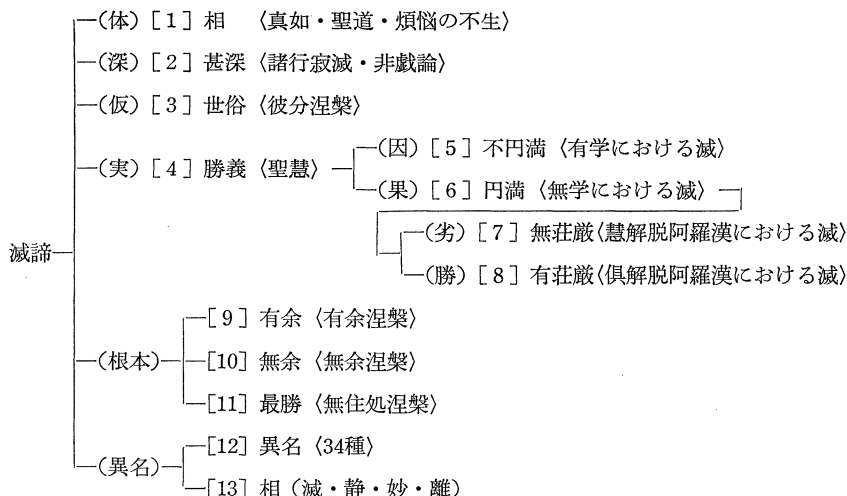
この瑜伽唯識学派の思想形成において中心的役割を果たした人物は、いうまでもなく無著 (*Asaṅga*) である。ここで、彼の思想をアビダルマ思想と対比するため、無著の論書の中で、特にアビダルマ的方法論で彼の思想を論述した『阿毘達磨集論』『集論』を取り上げる。

筆者は近年何回かの機会に分けて、無著の『集論』における滅諦・涅槃観の特質について発表して来たので、この機会に、それらの要点を纏めて、大乘アビダルマ思想における滅諦観の全体像を明らかにし、併せて今後への新たな問題点の幾つかを指摘しておきたい。

2. 滅諦の構造

『集論』では、滅諦に次のような13の観点から詳細な分析を加えている。これを注釈『阿毘達磨雜集論』やその注釈『雜集論述記』の記述を参考にして図示すると、おおよそ次のようになるであろう (拙稿B: p. 47 および拙著『アビダルマ思

想』法藏館・昭37: p. 277 における図を幾分補訂した)。



先ず、『集論』では、滅諦の本質として、真如と聖道と煩惱の不生という3つの(1)相を持つものであるとし、その様態として、諸行と寂静の関係が(2)甚深であるという点から、滅諦であると説かれる。

次に、滅諦の程度が段階を追って規定される。すなわち、彼分涅槃 (tadaṅga-nirvāṇa) というような (3)世俗 (sāṃketika: 社会的協約) という点からと、聖慧である (4)勝義という点から、滅諦の仮・実を明らかにし、その[4]をさらに、阿羅漢果への因果という点で、有学における滅たる (5)不円満 (因) と、無学における滅たる (6)円満 (果) という点から滅諦であるとする。そして、その中の[6]を、阿羅漢果の勝劣という点で、慧解脱阿羅漢における滅たる (7)無莊嚴という点からと、俱解脱阿羅漢における滅たる (8)有莊嚴という点から滅諦であると規定している。

さらに、本来の涅槃 (根本) という点から、(9)有余涅槃と(10)無余涅槃、そして、涅槃の中でも(11)最勝なる無住处涅槃が滅諦であると規定される。

以上の如き『集論』に説かれた滅諦の構造を見ると、阿羅漢果の中でも最高の境地である俱解脱阿羅漢における滅や有余・無余両涅槃ばかりでなく、社会的協約に基づく彼分涅槃の如き仮なる滅や、不円満・不完全な滅、あるいは、生死や涅槃に住せず未来際を窮めて有情を利樂する無住处涅槃までを滅諦であると規定している。すなわち、仮・実、有学・無学、有余・無余に関わりなく、涅槃と称

し得るものは全て滅諦であると理解していることになる²⁾。

このことは、説一切有部において、涅槃は無為法にして択滅であるとし、非学・非無学の法にして常に常住不変であるとする説と明らかに相違している。すなわち『集論』では、有学・無学なる滅や非学・非無学なる涅槃を建て、更に涅槃に似てはいるが真の涅槃ではない彼分涅槃や択滅に非ざる無住处涅槃までを滅諦であるとしている。そして、滅諦は仮なるものだけではなく、永遠なる真如の相として、実体的なものであると考え、ダイナミックなものであるという理解をも示す。

このようにして、『集論』において無著は自らの思想をアビダルマ的方法論で分析的に体系付けをした。このような方法論で体系付けられた無著の思想を「大乗アビダルマ思想」と名付けることにする。

3. 滅諦の異名

以上のような大乗アビダルマ思想における多様な滅諦・涅槃観に基づき、無著が、種々伝承されてきた滅諦・涅槃の異名を巧みに整理して、合理的な体系付けをして列挙したものが¹²⁾異名に関する滅諦の分析である。諸仏典においては、滅諦・涅槃あるいは無為などについて種々の異名を数えているが、『集論』では、次の34種を滅諦の異名として挙げている（この部分は梵文散逸部分であるので、サンスクリットはASBh.による）。(1)無余永断 (aśeṣa-prahāṇa), (2)永出 (pratiniḥ-sarga), (3)永吐 (vyantibhāva), (4)尽 (kṣaya), (5)離欲 (virāga), (6)滅 (nirodha), (7)寂靜 (vyupaśama), (8)没 (aṣṭaṅgama), (9)無為 (asaṃskṛta), (10)難見 (durdarśa), (11)不転 (acala), (12)不卑屈 (anata), (13)甘露 (amṛta), (14)無漏 (anāsrava), (15)舍宅 (layana), (16)洲渚 (dvīpa), (17)弘濟 (trāṇa), (18)帰依 (śaraṇa), (19)勝帰趣 (parāyāna), (20)不死 (acyuta), (21)無熱惱 (nirjvara), (22)無熾然 (niṣparidāha), (23)安隱 (kṣema), (24)清涼 (śiva), (25)樂事 (sauvarṇika), (26)趣吉祥 (svastyayana), (27)無病 (ārogya), (28)不動 (āniṣṭya), (29)涅槃 (nirvāṇa), (30)無生 (ajāta), (31)無起 (abhūta), (32)無造 (akṛta), (33)無作 (asaṃskṛta), (34)不生 (asamutpanna)。

滅諦・涅槃の異名については、かつて赤沼智善教授が問題提起と詳細な研究をされて以来、諸先学によって種々論究されて来たところである³⁾。その中で赤沼教授は南伝のパーリテキストを中心にして、北伝の『四諦論』などとの対応を試みたが、「比較すれば興味ある問題である」⁴⁾としながらも、対応のみで、その分析はなされていない。これに対して渡辺文麿教授は、それら原語の否定的表現

と肯定的表現という点に注目され、分類検討を試みたが⁵⁾、否定的表現についての検討のみに終わっている。筆者は、これら諸業績の指南に従って『集論』における異名を詳細に検討した結果、種々の興味ある問題点と異名の体系的分類の可能性を見いだした⁶⁾。

『集論』におけるこれらの異名と、諸経論に現われた滅諦もしくは涅槃・無為などの異名と対比してみると、大まかに次のような輪郭を掴むことが出来る。

- (1) 『集論』における異名の殆どが『瑜伽論』の中に見いだされる。
- (2) その項目・順序とも、『法蘊足論』や『雜阿含』13-4との一致が著しい。
- (3) 一部の異名に『舍利弗阿毘曇論』、『涅槃經』、『相應部』43、『中阿含』(「分別聖諦經」)との一致が見られ、異名形成の過程を考察する上において興味深い。
- (4) ニカーヤより以降の南伝の資料は概して『集論』の異名と関連は薄い。

これらのことを踏まえて、『集論』における異名を検討してみると、内容的あるいは伝承的に、幾つかのグループに分けることが出来る。その中の(1)~(8)の8つの異名は、經典からの引用句であり、原初ニカーヤ(仏陀の金言)における滅諦の説明句から発展したものである。また、(9)~(24)の5異名は、苦なるものとして有情が器世間に生ずることの否定を時間的に体系付けたものである。

ところで、(9)~(29)の異名群は、謂わば滅諦の通名とも見らるべきもので、一見羅列に過ぎないようであるが、諸経論における異名と対比したり、その原語を検討したりしてみると、それらが、思想的伝承を踏まえたものであり、その次第にさえも体系的意味付けのなされていることが判明する。その一例として、異名の原語が肯定的表現(P)であるか、否定的表現(N)であるかによって、それらを分類すると、次のようになる。

- (I) N (9) asaṃskṛta, (10) durdarśa, (11) acala, (12) anata, (13) amṛta, (14) anāsrava.
- (II) P (15) layana, (16) dvīpa, (17) trāṇa, (18) śaraṇa, (19) parāyaṇa.
- (III) N (20) acyuta, (21) nirjvara, (22) niṣparidāha.
- (IV) P (23) kṣema, (24) śiva, (25) sauvarṇika, (26) svastyayana.
- (V) N (27) ārogya, (28) āniñjya, (29) nirvāṇa.

上記の内(I)のグループは、先ず総名としての無為を挙げ、仏教以前から使われていたポピュラーな否定的表現で滅諦を説明したものである。(II)は、滅諦の作用を、原始經典以来の定着した譬喩的表現で列挙したものである。その順序も他の資料と殆ど一致する。(III)は、その作用を譬喩的に否定的表現で示し

たものである。(N)は、滅諦の徳を肯定的表現で、(V)は、それを否定的表現で示し、涅槃で結んだのである。もっとも、涅槃の原語 *nirvāṇa* における接頭辞 *nis-* は、必ずしも対象の相対的否定を意味するばかりでなく、むしろ論理の領域を超えた宗教的体験の積極的表現であること⁷⁾は、『集論』における涅槃の説明句を見ても判明するが、ここでは、*nis-* の第一義として否定的表現に分類した。

4. 滅諦の四行相

最後に『集論』では、異名の列挙の後、滅諦の4つの(13)相 (*lakṣaṇa*) について言及している。この4つは、有部における四諦十六行相の中の滅諦の行相と同一の項目であるが、その解釈の仕方に『集論』独自の特色が認められる⁸⁾。

(1) 滅相—〔流転 (*pravṛtti*) の因たる〕煩惱を離繋する (2) 静相—苦を離繋する (3) 妙相—高潔安樂なること (*śuci-sukha*) を本性とする (4) 離相—永遠と利益とを本性とする。〔再び退転しない (*apunarāvartana*) から。〕

(〔 〕内の記述は ASBh. より補ったものである)

この滅諦の四種の行相については、既に『集異門足論』7において「滅智」の説明として見えている⁹⁾。その各行相の説明としては、『婆沙論』79と『順正理論』74にそれぞれ二種の解釈を挙げ¹⁰⁾、さらに『俱舍論』では、4種の解釈を挙げている¹¹⁾。

ここで注目すべきことは、『集論』における滅諦の四相の各解釈が、何れも『俱舍論』の第三説に近いという点である。この第三説は、世親の自釈であるとも、あるいは、経部の説であるとも言われているものである¹²⁾。ここで、『俱舍論』における第三説が世親の自釈であるとすれば、『集論』とのこのような類似点は見られない筈である。従って、この第三説は、世親が自らの依って立つ素材(無著説または経部説)を依用して提示した解釈であり、それを基に、解脱に対する諸見の対治という実践的な意味付けをしたのが、第四説であると言えよう。註11)からも判明するように、第四説は第三説と内容的によく対応するからである。

以上のことから、我々は次のような興味深い問題点を見いだすことが出来よう。すなわち、筆者がかつて別の所で指摘したように¹³⁾、説一切有部と瑜伽唯識学派との思想的交渉や大乗アビダルマ思想と『俱舍論』における世親の思想との関連性の深いことを裏付けることが出来よう。

ここで、我々は、『俱舍論』における世親が荷担したとされる経部思想なるも

のと、『集論』において無著が依ったと思われるアビダルマ思想(化地部とされている)とが一体何であったか、あるいは両者に深い関係があるのではないかということを、このような観点から、もう一度洗い直して見る必要があるのではないかと思う。このことによって、唯識思想の成立およびその思想的基盤を一層明確にすることを今後の課題としたい。

- 1) 拙稿(A)「阿毘達磨集論における減諦の諸定義」印度学仏教学研究〈印仏研〉26-2, pp. 369-372。拙稿(B)「減諦・涅槃・彼分涅槃」仏教学セミナー29, pp. 32-52。拙稿(C)「瑜伽行派における減諦観の特質」真宗教学研究 3, pp. 63-65。拙稿(D)「減諦・涅槃の異名」大谷大学研究年報 37, pp. 125-183, pp. 1-11。
 - 2) 拙稿(B)及び前掲拙著『アビダルマ思想』pp. 276-279 参照。
 - 3) 拙稿(D) p. 132 にそれらの業績を紹介した。
 - 4) 赤沼智善『原始仏教之研究』(法蔵館・復刻昭56) p. 138 参照。
 - 5) 渡辺文麿「涅槃の異名に関する研究(一)」印仏研 11-1, pp. 219-221。
 - 6) この点について、拙稿(D)において詳述したので、ここでは、その要点のみを記述する。
 - 7) Cf. Genjun H. Sasaki, "The Historical Evolution of the Concept of Negation: Nekkhamma and Naiṣkramya", Journal of the American Oriental Society, Vol. 83, No. 4, 1963, p. 484.
 - 8) 拙稿(D) p. 147 にその部分の訳註を試みた。
 - 9) 減智云何。答、於諸灭減思惟，減・静・妙・離所起無漏智(大 26, 394 a)。
 - 10) 『婆沙論』[第1説]取蘊无尽，故名爲減。有爲相息，故名爲静。是善是常，故名爲妙。最極安隱，故名爲離。
 [第2説]性不相統，尽諸相統，故名爲減。三火永寂，故名爲静。脱諸横災，故名爲妙。出衆過患，故名爲離。(大 27, 409 a-b)。
 『順正理論』[第1説]息衆苦故減。三有爲相三火滅故静。[第2説]有余師説，衆苦息故静。如説苾芻諸行皆苦，唯有涅槃最爲寂靜。善故常故妙。一切災患永解脫故，極安隱故離。(大 29, 741 a)。
 - 11) 紙幅の都合で、第三説と第四説の趣意のみを挙げる(AK. p. 401)。
 [第3説]流転(pravṛtti)を離れるから減である。非苦(nirduḥkha)であるから静である。「比丘らよ、以上の如く諸行は苦であり、涅槃は寂靜である」と説かれたから。非上(niruttara)であるから妙である。再生がない(apunarāvṛtti)から離である。
 [第4説]解脱はない(nāsti)，解脱は苦(duḥkha)である、禪定の樂(sukha)は妙である、解脱は幾度も退転して(punaḥ punaḥ parihaṇito)永遠のものではないという見解をなすものに対して、それぞれ減・静・妙・離の各相がある。
 - 12) 『国順一切経』毘曇部26下 p. 356, 『仏教大系』俱舍論第4 p. 345 参照。
 - 13) 拙稿「心理的諸概念の大乗アビダルマ的分析—善心所—」仏教学セミナー39, p. 26 参照。
- ※ 資料 ASt. 109 b, ASch. 682 a, ASBh. pp. 75-76, ASVt. 257 b, ASVch. 743 a. 略号は前掲拙著「原典資料略符号」参照。
- (本稿は昭和59年度文部省科学研究費一般研究Cによる研究成果の一部である。)

(大谷大学講師)